

(仮称)公園案内棟／喫茶／工房・アート体験棟
基本計画策定
工房機能検討のための専門家ヒアリング調査結果

目次

1	ヒアリング調査の概要.....	2
(1)	ご協力いただいた専門家.....	2
(2)	日程.....	2
(3)	ヒアリングの進め方.....	2
2	結果のまとめ.....	4
(1)	工房のコンセプトについて.....	4
(2)	他施設との連携について.....	5
(3)	創作スペースの共有について.....	6
(4)	活動の「見える化」について.....	8
(5)	プログラムについて.....	9
(6)	安全・安心について.....	11
(7)	工房の規模について.....	13
(8)	工房の設備や設置する機材について.....	14
(9)	工房の一般開放について.....	18
(10)	管理・運営体制について.....	18
(11)	その他.....	19

1 ヒアリング調査の概要

(1) ご協力いただいた専門家

分野	氏名(敬称略)	所属
版画(リトグラフ)	遠藤 竜太	武蔵野美術大学教授
版画(銅版画)	大矢 雅章	多摩美術大学准教授
陶芸	安諸 一郎	陶芸アトリエ主宰、元町田市陶芸スタジオ講師
ガラス工芸	栗田 絵莉子	玉川大学芸術学部講師
教育普及	降旗 千賀子	元目黒区美術館学芸員 町田市立国際版画美術館運営協議会委員
教育普及	宮原 裕美	日本科学未来館科学コミュニケーション室室長 代理、町田市立博物館運営委員会委員

(2) 日程

氏名(敬称略)	1回目	2回目
遠藤 竜太	2021年9月24日	2022年2月25日
大矢 雅章	2021年10月3日	2022年2月17日
安諸 一郎	2021年10月25日	2022年2月24日
栗田 絵莉子	2021年10月26日	2022年2月17日
降旗 千賀子	2021年10月15日	2022年3月4日
宮原 裕美	2021年11月1日	2022年2月25日

(3) ヒアリングの進め方

① 1回目

町田市側から「構想」を説明した上で、新しい工房に関する下記(1)から(11)までの項目についてご意見を伺いました。

【構想】

- 芹ヶ谷公園”芸術の杜”の基本的なコンセプトは「子どもと体験」です。このコンセプトを象徴する施設のひとつが(仮称)工房・カフェ・公園運営棟であり、ここに新しい工房を設けます。
- (仮称)工房・カフェ・公園運営棟の場所は旧町田荘跡地を予定しています。
- 版画の分野は現在の版画工房・アトリエの機能を維持、加えて工芸(ガラス・陶芸)の体験ができる施設を想定しています。

- 版画は初めての人から上級者まで、工芸ははじめての人から少し慣れてきた人までを対象と考えています。
- 版画は工房内の機材を使用して自主的に制作を行う「一般開放」を行いますが、工芸は行いません。
- 工房は、様々な制作活動が互いに影響し合うことで多くの体験が生まれる一体的な空間として整備します。
- 共有可能なスペースは共有したいと考えていますが、たとえば版画制作で使用される可燃性溶剤の保管・作業場所と工芸の電気炉やガスバーナーとの位置関係や、陶芸の土ぼこりが版画制作に与える影響などが課題となると認識しています。
- 外から活動が見える施設にしたいと考えています。
- 利用者のニーズを踏まえ、夜間の活用も検討しています。

【ヒアリング項目】

- (1) 工房のコンセプトについて
- (2) 他施設との連携について
- (3) 創作スペースの共有について
- (4) 活動の「見える化」について
- (5) プログラムについて
- (6) 安全・安心について
- (7) 工房の規模について
- (8) 工房の設備や設置する機材について
- (9) 工房の一般開放について
- (10) 管理・運営体制について
- (11) その他

② 2回目

1回目のヒアリングでいただいたご意見を踏まえて整理・確認した市の考え方についてご説明し、さらにご意見を伺いました。

2 結果のまとめ

(1) 工房のコンセプトについて

- 工房での子どもの活動や「子どもと体験」といったテーマを、もう少し具体的に考える必要がある。
- 工房内だけでなく、外の公園も利用してはどうか。たとえばアウトドアと絡めて、子どもにマッチをすらせる、レンズで集光して火をつけるなど、火を扱うワークショップなどが考えられるのでは。
- 学校でできないことができるということも魅力ではないか。
- コンセプトがあいまいではないか。版画が専門レベルで、工芸・ガラスは体験レベルなら、施設を「版画工房」にしておいて、一部を「何でもできる“ラボ”(=陶芸、ガラス、子どもの体験ができる)」という位置付けと名称を付けることも可能では。
- 新しい工房を発足させるにあたり、まず、運営指針を明確にし、3つの工房の職員のコンセンサスが取れていることが重要だと考える。最初に建築ありきでは、十分な機能が果たすことができない。ここで重要だと考えることは「公共施設＝平等」ではないということである。平等にこだわると施設の特長性がなくなり、魅力はダウンすると考えられる。国際版画美術館の版画工房は、専門性を誇る数少ない公共施設である。ここから多くのプロ、ハイアマチュアが輩出されてきた。このような活動は、専門性の入口に立った人たちには、大きな目標になる。市民にむけての平等という観点のみで、内容を広く浅くしてしまうことは、結論的に安価なカルチャーセンターと同様の内容となり、専門性のある美術館のあるパークミュージアム構想内にある施設にはふさわしくないイメージがつく可能性もある。また、営業活動を公共の施設が妨害することになる。これらのことから、専門性を持ちつつ、広く市民を受け入れていく仕組みを新たに決め、それに沿って内容を精査しながら、建築計画を進めるべきだと考える。
- 国際版画美術館の版画工房は長い歴史と積み重ねにより、専門家からアマチュアまで幅広い層に認知されている。このような公共の工房は国内においても、横浜美術館などを含め数えるほどしかない。高度な専門性をもつ施設は、さまざまな観点で有効に機能する。子どもの体験プログラムでも、本物の機械を使用することで、体験できる経験は、生涯記憶に残るものになるだろう。場所のもつ意義は非常に大きいと思われる。専門性の高い施設は専門家だけにあるものではない。ものづくりを通じた交流拠点としての工房として考える場合、このような専門性の施設は安全面を確保することと使用の仕方幅広い層にアプローチすることが出来、ブランドの構築として有効である。どこにでもあるハードは、他の競合では優位性を保つことが困難なことから、ハード面では高度な専門性を保ち、ソフトとして幅広い層に安全に制作を楽しんでもらえるようなプログラムを作ることが望ましいと考える。
- 「(美術館に来てみたら)版画工房が見られた、のぞけた」というところに国際版画美術館の良さがある。視覚的に「参加する」ということ(目黒区美術館も同じ)。このようなタイプの美術館は少なく、国際版画美術館にとっても重要なこと。美術館の外を歩いて工房に行くのは大変なので、アプローチの仕方をよく検討しないと、工房の方へ人が行かなくなる可能性がある。
- 体験レベルの版画制作ができるではなんの話題にもならない。体験レベルならどこでもやっている国際版画美術館開館は、全国大学版画展をはじめ、様々な取り組みで現代の版画界を作ってきた。併設する工房を含め、その専門性ゆえに国際的にも存在の意義があったのではないだろうか。中国版画博物館(深圳)がその座を奪った感があり、(国家レベルの取り組みには対抗できないが)少なくとも日本の版画美術館として、市立であっても、そのレベルを超えた

啓蒙精神で、我々日本の優れた文化継承を率先して牽引する専門性を堅持してほしい。是非これからも日本を代表する版画美術館として、海外作家が訪れて制作したくなる美術館・工房であってほしい。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- 幅広い市民に楽しんでもらえる施設とします。
- 版画については、現在の版画工房・アトリエと同じく、はじめての人から本格的に創作を行う人までがそれぞれの目的に応じ充実した創作をおこなうことができる工房とします。
- ガラスと陶芸については、はじめて触れる人でも楽しく制作体験ができるプログラムを中心に実施します。
- 国際版画美術館は、館の基本的性格のひとつに「町田市の文化の中核として『質の高い活動を維持しながら』市民がいつでも自由に利用でき、観賞、創作、発表を通じて積極的に美術に親しむことができる『開かれた美術館』とする。」ことを掲げています。これまで果たしてきた「鑑賞」と「創作」と「発表」という活動どうしをつなげる役割、それらの活動に携わる人々どうしをつなげる役割を、新しい工房と二つの専門美術館とが密接に連携することで、より発展させていきます。
- 明確なコンセプトを設定し、二つの美術館の中核分野である版画及びガラス・陶芸はもちろん、様々な分野にひろがる制作や体験の活動について、具体的に検討します。

(2) 他施設との連携について

- 小学校の図工・中学校の美術の授業で、鑑賞授業の機会があれば、収蔵作品と共に制作工程を見せる。
- 美術館のプログラムと連動して、作品理解への手がかりとなるような講座を検討してみたいかがか。
- 版画作品は、技法を体験することで、より深く作品を鑑賞することができる。国際版画美術館の企画展と連携することは、鑑賞者にとって大きなメリットがある。国際版画美術館に収蔵されている精密な銅版画作品を、同じ技法で追体験するプログラムを体験できたら、鑑賞者はただ「細かい」ということだけではなく、金属の質やその時代性をも感じ、他の表現方法では得られない体験ができると思う。このような高度な経験は、専門美術館、専門工房があっても初めて開催できる他にないプログラムである。
- 版画には幅広い表現方法がある。大きな公園を利用した子どもプログラムも、季節によって幅広い技法から考えることができる。公園に落ちているさまざまな落ち葉を集め、落ち葉の上から絵具を吹き掛けることでうまれる表現や、こすりつけることで写し出すフロッタージュなどは、大人も子どもも楽しむことができる。専門技術を持ったスタッフがいたら、公園を制作場所として制作体験を提供することも可能である。
- たとえば日本科学未来館は、全国科学館連絡協議会に参加しており、地方の科学館に、日本科学未来館が制作した展覧会(巡回展)やパネルの貸し出しなどを行っている。

- ガラス・陶磁に関しては中上級者向けのプログラムは直接実施せず、民間と連携する形で提供する、というアイデアはよいと思う。
- 私立学校とも連携を深めると新たな展開が生まれる。
- 安全やコストという視点に加え、将来の施設転用の可能性まで考えると、陶芸に関しては全工程の体験を可能にするよりも、省ける機能は省き、特に上級者向けのプログラムについては民間の工房や大学などとのコラボレーションの形を積極的に取り入れて実現することが望ましいのでは。
- 町田市が玉川大学との連携を行う際、たとえば共催の体験講座で大学の工房を使いたい場合には、学生を講師にするなど教育的な活動の一環としての提案の方が通りやすいのではないか。
- 玉川大学でも、今後は大学の工房を使つての吹きガラスの体験講座を検討している。まずは平日の夜、大人を対象として検討している。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- より多くの市民に体験してもらえよう、小中学校など教育機関をはじめ他の団体や施設と連携した活動を行います。
- 新しい工房で対応できない技法については大学や民間工房で行うなど、他施設との連携を通じてより深い制作・体験を市民に提供します。
- 連携によって、芹ヶ谷公園内にとどまらない「多様な創作のネットワーク」づくりを目指します。

(3) 創作スペースの共有について

- 活動内容がもっと明確でないと、スペースの共有についての助言や検討は困難。工房での活動内容の方向性をまず考えないと、基本構造やレイアウトは考えられないのではないかと。
- 子どもの活動から大人の活動へ、版画の制作から工芸の制作へそれぞれ切り替える時に、内容にあったテーブルに入替えができるように設計してはどうか。
- 陶芸の土ぼこりの問題については、自身の工房では時間をかけて二度拭きをしている。工房をきれいに保つには丁寧な掃除が必要である。また以前は作業場を土間にしていたが、現在ではフローリングにして上履きで上がるようにしている。これは女性の受講者たちから、女性は作業に向かないハイヒールなどで来ることもあるので、上履きに履き替えたいとの要望があったためである。
- 創作スペースの共有は絶対にやめた方がよい。合理的に見えるがまったく合理的でない。大学においても、共有教室と工房は分けて考えている。一部のアトリエ(絵画のみ)は複数授業で共有しているが、版画、彫刻、工芸など、工房という場所を使う領域では、他のアトリエとは分離している。なぜなら、工房は機材があり、使い方がわからないとまったく思わぬ事故や怪我の原因となる。(プレス機に触る。薬品に触る、火災の原因となる、など)。国際版画美術館

レベルの工房は独立していないと危険だと思う。陶芸とガラスに関してはわからないが、専門性が高いならば独立して準備すべき。汎用性が高いほど専門性は低くなるのは、美術・工芸では自明のことである。

- 創作ということで同じことをしているように映るかもしれないが、実はまったく別物であるのだから、一緒にすることはできない。一緒にできるスペースのみ限定的に共有すべき。例えば、中央に3つの工房の共有スペース(講義、アイデアスケッチをする場所)を置き、そこから3つ(あるいは版画と工芸の2つ)の工房に分かれて作業する設計にすべき、という意見である。
- 交流の拠点としての工房を考えた場合、創作スペースの共有は制作者にとってとても刺激的な空間と言えるだろう。しかしながら、版画、工芸、陶芸は、それぞれ使用する材料が大きく異なり反するものである。例えば、工芸や陶芸では、高温になる窯や火を常時使用する。一方、版画では、有機溶剤を多用する。有機溶剤の揮発、引火の可能性を考えた場合、これらの工房の区分けは必ず必要になる。陶芸では、制作に粘土を使用するが、乾燥した粘土は土ぼこりとなり、他の機材がある場所での使用は困難である。工芸でも火を使用し、また金属粉などがでる。これらの専門分野をひとつの場所に置くことは、管理上、不可能である。また、専門外の人が興味本位で専門性の高い設備に触れてしまうことで事故につながる。
- このような異なる状況を鑑みた場合、各専門工房はそれぞれにガラス戸などで仕切り、描画(制作)スペースを中央に設置し共有する考え方ができる。他の表現方法の工房が常に見えることで、交流の糸口になり、興味も広がる。また、安全面でも中の様子が常に見えることは、管理上有効である。合わせて利点として、描画スペースを共有にしておくことで、さまざまなワークショップや講評会、イベントにも随時転用することが可能となる。子ども向けの講座の場合でも、専門機材とそうでない場所を区切ることで、安全面を常に確保しながら子ども達の興味を育むことができるのではないか。
- 「ガラス」と「陶芸」とで作業台を共有することは、ガラスをカットした後に出るガラスくずや粉が粘土に混ざってしまい、怪我につながるのを避けた方がいい。回避策として、ガラス工芸の作業時にはゴム製やフェルト製などの特別な天板を用意し、他の作業ではそれを外すようにしてはどうか。スタンドグラスのはんだ付けの際には焦げるので木材や不燃性の天板にした方がよい。
- パート・ド・ヴェール技法では、石膏型を制作する段階で石膏が舞うことがある。
- サンドブラストでは、どこに設置するかにもよるが、コンプレッサーからはそれなりの音が出る。
- 「見える化」と「共有」の両立のために、ガラス製のパーテーションで区切ることも有効ではないか。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- 描画スペースなど、共有できるものは共有し、スペースの有効活用を図ります。共有化は効率のよい空間利用ができると同時に、異なる表現方法の制作が見えることで、新たな興味や交流が生まれ、市民の創作活動が深まることが期待できます。
- 専門性の高い機材の設置場所や、火気・薬品を使用する場所は、他の制作スペースとガラス戸や透明なパーテーションで仕切るなどして事故防止に努めます。また、火災やケガなどの安全性や、ほこりやにおい、騒音などの管理上の問題点に対しては、十分に配慮します。

- 共用部分については、曜日や時間でジャンルを切り替えるなどして、安全に制作できるようにします。
- 工房における活動内容を明確にし、清掃やレイアウト変更が速やかにできるような設計や什器の整備を検討します。

(4) 活動の「見える化」について

- 日差し、紫外線は考えなくてはならない。制作者は作業しづらいかもしいが、火災や怪我などに即座に気がつくなど、管理面では必要なことである。また、美術館という性格上、制作者も公共の場であるという意識を持つべきである。
- 玉川大学のガラス工房も、外から見えることを狙ってガラス張りにしていて、どんな活動をしているか外からわかるようになっている。一つの校舎に複数の学部が共存しているため、いろいろな領域の学生が中の活動を見て、やってみたいと思わせる効果を期待している。
- 外から活動が見えることは、幅広い市民に内容を知ってもらう契機となることから、大切な要素のひとつであると考え。一方、制作に集中したい制作者にとっては、不特定多数の方々からの視線はあまり気持ちのよいものではない。ゾーニングを考え、室内の待合室のような場所から中が見えるなどの、使用者に対しても配慮が必要である。外部から中が見える場合、版画に限って言えば、日光が入ることで、インクの変色や室内温度の上昇による作業に対する影響も考えられることから、どこを見せるのか、誰に見せるのか、その辺りの位置づけが必要ではないかと思う。
- 全部ガラスだと、見苦しいもの(散らかった様子など)も見えてしまう。見せるには覚悟が必要。オープンな性格を持たせるのであればなにもやっていない時の見え方のことを予め考えておくべき。活動が行われていないときにも見せて「おもしろそう」と思ってもらえるのが良いが、それを念頭に置いた計画・設計が必要。閉められるようにするのも良い(目黒区美術館はブラインドを降ろせる)。横須賀美術館も同じように開放的だが、参考にはならない。
- 何も活動しない時には、参加者の作った作品の展示をするなど、工夫をしたらどうか。
- 日本科学未来館では、「実験工房」と呼んでいる体験講座を行う部屋が2つある。ひとつは水が使える部屋、もう一つは水が使えない部屋で、いずれも20人程度が作業できる広さである。ガラス張りで、カーテンで目隠しできるようになっている。ガラス張りのメリットは、人が活動している姿はアクティブに見えて人目を引くことと、そこから自分もやってみたいという人が出てくる点である。逆にデメリットは、毎日体験講座を実施するわけではないので、使用していないときに閑散として見えてしまい、施設を有効活用できていないという印象を与えかねない。使用しないときは市民の活動場所として貸し出せるとよいのでは。
- 「外から見える」に加え、建物の中でも、例えば「カフェから見える」ことも実現できるとよいのでは。
- 制作の様子に限らず、デモンストレーションを見せる形でも成立する。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- 工房内の活動が外から見えることで、公園来園者が制作に興味をもったり、やってみたいと思ったりする効果が得られます。
- 日差しや紫外線、温度変化が機材や薬品、材料に及ぼす影響や安全管理、防犯について丁寧に検討します。
- 内部のレイアウトやデザインにあたっては「見せる」「見られる」ことを十分に意識するとともに、必要に応じて「見せない」ようにできるようにします。
- 内部でプログラムを実施していないときの見せ方、使い方について検討します。

(5) プログラムについて

- 質的維持と共有化は机上の空論で、これに関しては現在プログラムを行っている現場の意見を尊重すべきだと思う。
- ガラス・陶芸(入門レベル)と版画(専門レベル)のバランスが見えづらく、助言しづらい。
- シルクスクリーンでオリジナルのエコバッグ、T シャツ作り。モノタイプのワークショップ。フロッタージュ、拓刷りなどからドローイングに展開するワークショップ。版画によるオリジナルブックカバーのワークショップ、など。
- 子ども向けとして、専門的な技法を、できるだけシンプルにした内容で、版画の面白さを体験できるプログラムを考案する。一方、公園内の自然物を利用するなど、遊びの延長で取り組めるプログラムも視野に入れてみてはどうか。
- 版画やガラス、陶芸といったジャンルからプログラムを考えるのではなく、子どもの創造性に注目したプログラムを組み、そこにガラス、陶芸を当てはめてはみてはどうか。
- これまで、国際版画美術館の工房で行われている創作活動は、個人の制作、講座を両輪にして、底辺を広く、そして専門性を深くしていく方法で行われてきた。これについては、当然のことながら維持されていくことが望ましいと考える。しかしながら、今後、公園内の交流拠点としての位置づけを考えた場合、底辺を広げていくプログラムを幅広く提案し、活性化させて行く必要も視野に入れるべきである。陶芸など工芸と関連付けた内容は検討の余地がある。例えば、シルクスクリーンで制作した表現を、陶器に焼き付けることができる方法、銅版画の技術はもともと金工から発生したもので、金属を銅版画の技術で彫り、アクセサリーを作るなど、3つの工房を横断することで生まれるプログラムなどを提案することで、これまでそれぞれの表現に出会うことがなかった人にもアプローチする機会になるのではないかと考える。
- 時々専門性ある作家のワークショップを開催し、施設に記録を残すことと、利用者の知的好奇心を触発できるような講座を計画する。これは今までの取り組みにあるので、陶芸など工芸を横断するプログラムを考案してみたいかがか。
- 入門のレベルを明快に設定することで、教室内のレベル差を作り出さない運営を目指すことで、幅広い参加者の獲得を目指してみたいかがか。
- 玉川大学では、現在吹きガラスの授業では学生6名に対し、講師が2名ついている。
- バーナーワークは、初心者の制作では基本的には参加者1名に対し、講師が1名つかないと

難しい。講師がマンツーマンでつけば、小学校低学年でも体験は可能。ただし継続的な講座の場合には、小学校5年生以上が望ましい。

- ステンドグラスは、はんだごての取り扱いがあるので、学校の授業では小学5年生以上を対象としていた。
- スクリーンプリントとガラスの組み合わせで特殊なインクで転写紙シールを作ったり、ガラス版画というジャンルもあるので、「版画」と「ガラス」のコラボレーション企画をしたりということも可能と考えられる。
- 具体的な「もの」をつくる体験だけでなく、「素材」や「状態の変化」などに焦点を当てると、企画に広がりが出るのでは。たとえば陶芸なら、土の違いを楽しむ講座などはどうか。
- プログラムの中に教育的な気づきの視点があるとよい。たとえば、毎日使っているお皿の素材から考えてみるとか、右利きと左利きで使いやすい道具が違うことから多様性への理解とか。「美術」の範囲に留めてしまうのではなく、工芸は「地理」や「歴史」に関連付けられるし、色（発色）は「理科」につながっていくようなプログラムに仕立てると「覚えさせられる」ものとしてではなく、自然に身に着くのでは。
- 日本科学未来館では、教育普及のサイトを充実させており、学校向けのコンテンツを提供している。昨今は学校で総合的学習の時間が設けられるようになったが、何をすればよいか戸惑っている先生たちも多い。SDGsの授業で使いたいといったニーズも増えている。
- 美術館が行う体験活動、学芸員が企画するプログラムはどうあるべきかが重要である。プログラムを「教育」として位置付け、活動方針を長期的に考えながら、ここでしかできないプログラムとして展開してゆく。展示や収蔵品との関りなど、美術館ならではの要素を取りこんだプログラムを提供する。学芸員がプログラムを考えることが重要であり、美術館の務めである。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- 幅広い市民を対象に、はじめて触れる人や子どもから楽しめるプログラムを提供します。
- 版画においては、専門性の高い講座や公開制作も実施します。
- 版画・ガラス・陶芸を横断的に関連づけたり、公園の自然を活用したりすることで、パークミュージアムらしい個性的なプログラムを提供します。
- 「鑑賞」「創作」「発表」それぞれの活動や、その活動に携わる人々を結びつけるプログラムを、隣接する二つの美術館と連携して展開します。これにより、美術館の価値向上にも貢献します。
- 個別の技法の体験や知識の習得にとどまることなく、創造性を刺激し、様々な気づきを生み出すことを目指します。

(6) 安全・安心について

- 安全・安心面を確保するには、部屋のゾーニング、動線の確保が重要だと考える。子どもから大人（シニア）までが使用することを考えると、危険区域とそうでない場所の棲み分けが必要になる。合わせて、工房内にあるものが、個人で使用してよいものか、またそうでないのかなど、明快なルール作りも重要である。
- 工房内の表示（サイン）をわかりやすくデザインすることが、安全な利用につながる。
- 有機溶剤の基本的な危険性はすでにほぼ認知されていると思う（美術家連盟からガイドブックが出ている）。インストラクターは常駐すべき。臭いや騒音は通常の作業では問題にならないはずである。排水に関しては日本画の絵の具なども流せなくなってきたので、専門家の意見が必要。
- 排水には配慮する必要がある。特に釉薬などに含まれる重金属の処理はきちんとしなければいけない。沈殿槽を設け、産業廃棄物として処理する費用も必要である。
- 粘土や釉薬はつねにメンテナンスをする必要があり、また釉薬には危険な重金属も含まれていて扱いには注意を要するので、むしろ市の体験工房には置いておかない方がよい。
- 電動ろくろはけがの危険もあり、講師の目がないところでは使わない方がよい。
- 陶芸窯はメンテナンスが必要であり、使用上の注意事項も多く、講師の目がないところでは使わない方がよい。町田市の体験工房には陶芸窯は設置せず、講師が自身の工房で焼成する方がよいのでは。
- 機材導入にあたっては、陶芸、工芸、版画と専門の材料開発を行っている新日本造形社などにも導入時に相談をすべきだろう。それにより建築の構造が変化する場合も考えられる。個々の専門家の意見も重要だが、総合的な視点から機材の配置を行う必要がある。
- 換気・空調についてはよく考える必要がある。大事なことは、スタッフが本館から外を通过这个の工房まで来ることになるので、モノの移動、スタッフの移動が安全かつスムーズに雨風の影響を極力受けないようにできることを要望する。
- 応急処置のできる場所、気分が悪くなった人が休める場所が必要ではないか。

動線、レイアウト	(8) 工房の設備や設置する機材について 参照のこと
薬品管理	<ul style="list-style-type: none"> • 安全保管庫で管理する必要がある。有機溶剤は、使用する場所をある程度限定し、空調の設置により部屋に拡散しないようにする必要がある。腐蝕液の塩化第二鉄は、廃棄する際に、業者委託として、地域の処理管理方法に基づき処理を行う。
機材管理	<ul style="list-style-type: none"> • プレス機などは業者による保守点検を行い、安全に使用出来るようにメンテナンスを行う必要がある。
セキュリティ	<ul style="list-style-type: none"> • 決められた使用者以外が工房に立ち入ることのないようにすること。危険場所にはカメラを設置し、事故の際に検証できるようにしてはいたかがか。

人員配置	<ul style="list-style-type: none"> • 工房には常に指導者または管理者が常駐していることが望ましいと考える。
バリアフリー	<ul style="list-style-type: none"> • 工房内に段差がないように設計することが望ましいと考える。しかし、腐蝕室は密閉性がある方が好ましいので、この限りではない。
床材	<ul style="list-style-type: none"> • 重量物を設置することから、重量に耐えうる作りであり、できる限り平滑面である必要がある。
安全衛生管理	<ul style="list-style-type: none"> • 十分な空調の設置をすることで、有機溶剤による健康被害は著しく少なくなることが予想される。 • (排気について)有機溶剤を排出する際に法律で決められた仕様が求められる。
環境配慮	<ul style="list-style-type: none"> • 武蔵野美術大学は、これまではノントキシックに切り替えるよりも制作環境の改善によって対応してきた。基本的な考えが、制作者の望む表現優先であったからである。現状でも防毒マスクをするなどの個々の対策も含めて行っている。しかし、ノントキシックに移行すべき時期にあるという認識は持っている。 • 公共の施設という観点から、広く使用されているものを使用する方が望ましいと考える。しかしながら、今後現在使用されている有機溶剤から人体に影響の少ないものに切り替えていく必要があるだろう。しかし、これは材料費との兼ね合いなので、経営との関係性となる。
玉川大学の吹きガラス炉について	<ul style="list-style-type: none"> • 熔解炉は 1,240℃、一日中(24 時間)約 5 ヶ月間火を入れたままにしている。壺替えは年2回実施。(熔解炉は電気熔解炉) • 停電時、ガラス炉の中のるつぼが割れてしまうと、溶けたガラスが流れ出す危険性があるため(周囲に引火する危険がある)、停電時にはすぐ駆け付けられるよう、教員の一人は大学のすぐ近所に住み、もう一人も大学から 30 分以内のところに住んでいる。 • 炉のところにはウェブカメラも設置しており、設定温度から±50℃以上の温度異常を感知すると職員に連絡が来るシステムになっている。また緊急時対応マニュアルと地震発生時対応フローを作成している。
玉川大学の工房のその他の設備について	<ul style="list-style-type: none"> • 排水には気を使っており、石膏や粘土、研磨剤等を使用する作業では、まずバケツに水をためてその中で道具や作品を洗うようにしている。石膏クズや研磨剤、ガラス粉を沈殿させ、上澄みの水を流しに流すようにしている。また流しの下にも沈殿槽を設けているので、沈殿は2段階で行っている。 • バーナーワークのためのガスバーナーも設置しているが、火元からポンペをどれだけ離して設置するなどの基準があったはずである。ガス会社や消防署に聞くのがよいだろう。溶剤についても同様である。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- 幅広い世代が利用することを念頭に置き、また版画・ガラス・陶芸という異なるジャンルの制作を安全に行えるよう、部屋のゾーニングや動線を計画します。
- 安全性を考慮して、危険な薬品や火気を使用する腐蝕室やガスバーナーを使用する場所は、他からは壁などで区分します。
- 制作の際に、火気が使用されたり、また有機溶剤や薬品、重金属、粘土やガラスクズなどが排出されたりするため、換気や排水等について専門事業者や所管の官公庁などの助言を受けながら、適切に整備します。
- 機材や薬品、材料の取り扱いやその用途、制作工程、メンテナンスに精通したスタッフを置き、利用者の安全確保と機材や設備の適正管理に努めます。

(7) 工房の規模について

- 既存の版画工房のスペースは最低限必要である。国際版画美術館の工房はよくできていると思う。省スペースという考えは、個人ならともかく、不特定多数の者が作業する場合に大変危険である。
- 版画工房内では4つの技法制作を行っている。それぞれ異なる材料、方法をとるので、それぞれに特化したスペースが求められる。このため支障なく使用されている現在と同規模の面積があることが望ましいと考える。面積が狭くなると、事故も起こりやすくなることから、動線を確保した施設設置が望まれる。活動内容をはっきりさせることで安全な面積を割り出してゆくことができる。
- 工房に職員が常駐できるスペースが必要(特に工房と美術館が別棟になる場合は)。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- 版画工房については現在の機能に見合った面積を確保します。設計にあたっては、安全性に十分配慮して面積を検討します。

(8) 工房の設備や設置する機材について

ゾーニング、レイアウト	<ul style="list-style-type: none"> • 前述の通り、製版・印刷スペースは独立してあるべき。描画スペースは共有アトリエでも可能。 • ひとつの大きな部屋にすることで、思わぬ現象が起きる。例えば光熱費の増加、音の反響、粉塵、匂いの拡散など。これらの現象を防ぐには、専門分野をガラス戸などで可視化しながら、間仕切ることによって解消される。広い動線と適切なレイアウトの設定は、初めて部屋に入る使用者の安全性を確保するためにも重要な検討事項だと考える。
通路	<ul style="list-style-type: none"> • プレス機や重量物を移動させることや、ロッカーなどの設置を検討して広めの通路を用意すべきである。
出入口	<ul style="list-style-type: none"> • 台車が入れるよう段差をなしに。 • 段差のない、引き戸が使い易いと思う。間口は 180cm あると、重量物の運搬に支障がない。
床	<ul style="list-style-type: none"> • コンクリート打ちっぴなしは、掃除はしやすいが寒い。 • 版画制作の床は水を使うので、滑りにくいもので、掃除がし易いものが望まれる。腐蝕室は、酸と水を使用するので、耐酸性のもので、掃除がし易く滑りにくいものがよいだろう。
机・椅子・棚	<ul style="list-style-type: none"> • 長時間の作業となるので、椅子は座り易く疲れにくいものが求められる。机は、作業用のしっかりしたもので、移動ができるものが、汎用性があるといいだろう。棚は鍵が閉まるもので、管理上、一般使用者と管理者が区別して使用できるものがあるといいだろう。
水道・排水設備	<ul style="list-style-type: none"> • シルクスクリーンでは高圧洗浄機、リトグラフと銅版画ではシャワーヘッドが必要である。 • シンクの奥行きと深さがあることで、水の飛び散りが少なくなる。銅版画の腐蝕作業においては塩ビで製作されたものが必要になる。 • 排水設備は、腐蝕設備に注意が必要である。腐蝕の方法にもよるが、できる限り、腐蝕液の原液、洗浄液が下水に流れない工夫が求められる。業者と要検討項目である。この設備は塩ビでの制作が必要となる。既製品は使用できない。 • ある程度の人数が同時に使える流しは必要。 • 流しにはガラス粉などを集積するための沈殿槽を設ける必要があり、そこは年何回か掻き出して産業廃棄物として廃棄する作業があるため、油や有害な薬品などは同じ流しを使わない方がよい。沈殿物のリユースを行わないのであれば、ガラスと陶芸での共有は可能。
照明、採光	<ul style="list-style-type: none"> • LED 照明を設置して、部屋全体が明るい方がよいと思う。

電源	<ul style="list-style-type: none"> 電源コードは、場所にもよるが、天井から下ろす形のもので設置されていると、安全面からも使い易く良いだろう。床は水が落ちたり金属粉が落ちたりするので、プレス機の下に設置する場合は、水や埃によるショートが起きないような処置が必要である。
換気	<ul style="list-style-type: none"> 有機溶剤の揮発した蒸気は、天井に向かわず、床面に溜まる。そのため、床付近に排気用のファンの設置をすることで、工房内の空気を綺麗に保つことが可能である。また、リトグラフプレス機や、木版画プレス機などの油性のインクや薬品を使用する付近には、ダクト式の空調の設置はあったら良いだろう。
空調	<ul style="list-style-type: none"> 個々の工房やスペースにそれぞれ独立した空調があると良いと思う。一元的に管理されたものだと、各工房の作業により、使用できたり、できなかったりと大変不便である。
収納	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの工房にウォークインクローゼットのような収納倉庫の設置が必要である。一元的に材料を管理することで、購入の無駄やスタッフの入れ替わりにスムーズに対応することが可能である。 様々なジャンルの制作をするならば、十分な収納スペースが必要。しかもそれが隠せること。
図書・資料	<ul style="list-style-type: none"> 3つの工房に関係する資料を体系的に揃えた図書室または、資料棚が必要である。
Web 環境	<ul style="list-style-type: none"> ワークショップ、講義にはあった方が良い。 無料の無線 LAN の導入は、最低限の設備として必要だと考える。説明等でオンラインの情報をプロジェクター、大型のモニターなどで投影することもあるので、有線 LAN のコネクタを各所に設置することも重要である。 日本科学未来館では、Miraikan Free Wi-Fi(館独自)など、いくつかのWi-Fiが利用登録をすることで使用可能である。

陶芸	<ul style="list-style-type: none"> • やきものの本来の制作工程としては、①土づくり、②成形、③焼成、④釉薬づくり、という工程があるが、体験講座で参加者が体験するのは②の成形のところだけである。本格的な陶芸を行おうと思うと、立派な設備が必要で、かつそれを管理できる専門家も必要になってきてしまう。陶芸については、極論すれば参加者が粘土をこねるスペースと机があればよい。必要な道具はその都度講師が持ち込み、①土づくり、③焼成、④釉薬づくりの工程については、講師が自身の工房で行えばよい。 • 成形後、講師は粘土の乾き具合を見ながら高台を削るなどの作業を行うが、どのタイミングでその作業に入れるかは作品をずっと観察していないとわからない。自身の工房に参加者の作品を持ち帰れば、手が空いた時にその作業に入れるが、芹ヶ谷公園の工房で作品が乾燥されていると、いちいちそこに赴いて作業をせねばならず、負担が大きすぎてあまり現実的ではない。 • 参加者が粘土をこねて成形したあとは、講師が自身の工房に持ち帰り後処理をすればよいので、乾燥棚も不要と考える。
ガラス	<ul style="list-style-type: none"> • バーナーワークを行うなら、炎がよく見えるように周囲は少し暗めにした方がよい。 • バーナーワークでは、作業中向こう側に熱いガラスが飛ぶ危険があるので、壁を向いて作業するのがよい。また、床と壁は耐熱ボードにした方がよい。参加者には、分厚い綿製のエプロンも必要である。 • バーナーワークでは、ガスバーナーだけでなくコンプレッサーが必要である。 • ステンドグラス体験では、はんだ付けのためにコンセントが多数必要。天井からぶら下がったコンセントがある工房もあるが、はんだごてが浮いてしまうと危険なので、コンセント(あるいはケーブル)を机に固定する作業しやすい。 • 玉川大学の電気炉(キルン)は温度上昇に 5 時間ほどかかる。想定するメニューによって機材の大きさ等のスペックを選択。

デジタル対応	<ul style="list-style-type: none"> • 自分自身、デジタル・アナログ両方を使って制作しているが、その経験から述べる。デジタルの進化にハード・ソフト両面で順応できるなら、当然デジタル対応したほうが良い。しかし現実として無理ならば、むしろ従来の手業に限定するべきだと考える。自分としては、現在保有している石版石を活用してほしい。国際版画美術館に行けば石版画が制作できる、というのは、これからの日本のリトグラフにとって重要なポイントだと着目している。 • 現在、デジタル表現も版画のひとつに考えている。これを新工房ではどのように考えるかで導入するのか否か決まってくる。今の若い世代は、タブレットで絵を描くことが基本となっているので、導入することで、これまでと異なる世代のユーザーが増える可能性もある。例えば簡易的な本を作る、デジタルとアナログの融合で制作するなど、この方法を取り入れることで、これまで工房を利用しなかった方々の利用も考えられる。一方、導入した場合、機器備品の入れ替えが従来のプレス機などに比べて早いサイクルで必要なこと、メンテナンスも含め専門のスタッフが必要になると思われる。これには多額のランニング費用が求められてくる。現在、3D プリンターも含め幅が広がってきているので、工房の運営指針により、どこまで版画として考えるか定義の上で、導入を検討すべきだと考える。
附帯設備	<ul style="list-style-type: none"> • 利用者用に、材料や刷った紙などを置いておくスペースが求められる。 • 飲食や休憩ができる場所を工房の近くに設置することで、快適に作業ができる。工房内での飲食は基本禁止することで、事故の可能性が軽減できる。
搬入	<ul style="list-style-type: none"> • 重量物の移動を考え、搬入口の設置をすることで、リノベーション等が行い易くなる。 • 雨に濡れないで駐車場に行けると良いと思う。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

<ul style="list-style-type: none"> • 安全で魅力ある創作活動を展開するため、建物（ゾーニング、レイアウト、通路、搬入口）、設備（床材、照明、電源、換気、空調、水道、排水）、制作のための機材、什器、収納、付帯設備、Web 環境等について、制作内容や事業内容に基づいて十分に検討を行います。 • 具体的な仕様については工房の設計時に検討します。
--

(9) 工房の一般開放について

- ある特定の長期使用者がいることで、工房の雰囲気固定化される懸念が生まれることから、連続での使用に際して最長の利用年度を設定するなど、工房の新陳代謝を促す工夫をしてみたいか。
- Web での予約やある程度まとまった作業時間の提供、夜間枠の創設などで利便性を上げられるのではないか。
- 玉川大学では、カット機(片軸研磨機)と研磨機(平盤研磨機・両軸研磨機)以外の機材や工具については、学生に単独では使用させていない。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- 工房の設備や機材を使用して、自主的に制作をおこなう「一般開放」を行う際には、各利用者が安全に作業を実施できるような管理体制を検討します。
- ガラスと陶芸については、安全を考慮し、一般開放は行いません。
- 新たな利用者が参加しやすい環境づくりを検討します。

(10) 管理・運営体制について

- 工房の連続使用など、短い期間で制作を集中して行いたい作家もいることから、予約の方法を柔軟にして、さまざまな形での使用に対応してみたいか。
- 日本科学未来館では、平日に比べ土日の方が入館者数が多い傾向にある。コロナ前には年間 150 万人ほどが来館したが、混雑しすぎて常設の体験ができず不満につながってしまった。
- できる限り長い時間使用できることが望ましい。夜間使用も含めて 9 時位までは使用できると、利用者の利便性が上がると考えられる。
- 夜間の開館についてニーズはあると思う。日本科学未来館でも話題になったことはあるが、現在は実施していない。
- 自身の工房では、コロナ前は 19～21 時の夜間の講座も開催し好評であった。
- 特定の人たちだけが頻繁に使うのではなく、「裾野を広げる」ために、全市民にとって開かれた使いやすい工房にすべきである。利用時間もその一要素である。
- 芹ヶ谷公園で夜間講座を行うなら、駐車場の確保が必須だろう。
- 講師が体験工房で作陶して利益を上げるようなことは、あってはならないと考える。
- 管理や運営に関わるパートナーを選定する際は、施設のコンセプトを市と共有できる団体であるか、営利のみを追求しようとする団体でないかどうか、しっかりと見極める必要がある。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- より多くの人々が利用しやすいよう、様々な層のニーズを把握し、夜間利用や短期集中型利用なども含め、柔軟な運営を検討します。

(11) その他

- スタッフが使いやすい、行き来しやすい設計にすべき。
- 美術館に向けた視線がそのまま体験工房に向くような建築の仕掛け・グラフィック的な仕掛けを作る。
- 現在の国際版画美術館における工房と美術館との行き来(人、もの、道具)が、移転後も途絶えないような「つなぎ」を確保することが必要。美術館と工房の関連性を明確にすることが必要。館を出ても意識が途切れないように、サインやグラフィック、掲示についてはプロを入れて充実したものにした方がよい。
- 全体を見渡すことのできる専門業者との相談が必要である。その上で、個々の納入業者などの意見も取り入れるべきと考える。
- (作品展示について)制作者にとって発表活動は重要である。任意で参加できるような仕組みがあることで、施設利用の活発化が期待される。
- 物販を行える施設で、基本的な材料の販売を行うことで、利用者の利便性は上がり、満足度が上がるのではないかと考える。
- ボランティアが育つと良いが、美術館側の努力が必須。一度に沢山募集するより、モチベーションの高い2人くらいから始め、徐々に増やす。
- 日本科学未来館では、企画展の際には、子ども向けのチラシ(割引券付き)を作成し、近隣の学校の全校児童・生徒に配布している。学校から配られるものが、広報としては一番効果がある。
- 「町田」というコミュニティの中であって、来館の潜在顧客がいるのは施設の強みである。
- 次回展覧会のチラシは、予告として重要なのでその前の展覧会の開幕までには作成し、会場に設置している。
- ツイッターは、いかにも宣伝という内容のツイートは「いいね」が伸びない。館のウラ情報、といった内容の方がウケが良いようだ。
- 日本科学未来館では、展示解説は独自のアプリも導入しているが、システムのアップデートに難しさを感じている。展示解説のテキストは3か国語(日・英・中)、フロアマップは4か国語(日・英・中・韓)で掲示している。
- 日本科学未来館では、5年くらい前までは営業担当がいて、全国の学校に修学旅行先の候補地として売り込みをしていた。
- 会員限定のサービスを用意することもリピーター確保として有効。ただし、会員が増加すると提供するプログラムが量的に追いつかず、会費に見合わないという不満につながるリスクがある。
- 国際版画美術館、市立博物館の30年以上にわたる歴史と経験の厚みを基本計画に入れ

られると良い。

ヒアリング結果を踏まえて整理・確認した方向性

- プログラムのなどのソフト面、外観やサイン設計などのハード面の両方から、美術館と工房の連携を行います。
- たとえば納入業者などにヒアリングを行うなど、活動全体を見渡しながら設計します。
- 画材の販売なども検討し、利用者の利便性を高めることで、施設の満足度を高めます。
- 施設の活性化をはかるため、作品を発表できるスペースを設けることなども検討し、制作だけでなく創作活動全体を支援します。